

シメ得ルヲ目的トスルモノダト説明シタ「スマツツ」案ハ英國原案第三項カラ書キ出シテ、獨逸植民地及舊土帝國所屬地域ト制限的ニ記載シテ在ツタ此冒頭ノ文句ヲ、聯盟起草委員會ガ「今次ノ戰爭ノ結果從前支配シタル國ノ統治ヲ離レタル植民地及領土」ト抽象的文句ニ變更シタノハ、一項ヲ追加セズニ大統領ノ希望ヲ受入レタノダト見ルベキデアル。

委員會ニ於ケル聯盟規約ノ第一讀會ハ二月十日ノ第七回會議デ終了シ、引續キ第二讀會ニ移リ、二月十三日ノ第十回會議デ之レヲ終リ、翌十四日ノ總會議ニ報告シタ後、規約案ハ公表サレタ、委任統治ニ關スル規定ハ第二讀會デ多少字句ノ變更ヲ受ケタガ、此時白耳義ノ「イーマンス」外相ハC式地域デモB式地方ト同ジ様ニ聯盟各國ニ均等待遇ヲ保障スベキダト主張シタラ「スマツツ」將軍ハ本案ハ最高會議デ大論戰ノ末漸ク纏マツタノダカラ、委員會デ論議セヌ様ニシテホシイト注意シ、其後三月二十二日カラ再會サレタ聯盟委員會デハ此規定ニ少シモ手ヲ觸レナカツタ。

第三十四章 委任統治ノ細目

獨逸植民地ノ拋棄ニ關スル總括規定

委任統治ニ三式アルコト、A式ハ聯盟規約第二十二條ノ第四項、B式ハ第五項、C式ハ第六項ヲ基礎トスルコトハ人ノ皆知ツラ居ル所デ、A式委任統治ハ舊土耳其帝國所屬地域ニ關スル事ダカラ、之レハ追テ土耳其トノ條約ヲ述ベル機會ニ讓ル方ガ至當ダト思フ。B式トC式ノ委任統治ハ悉ク舊獨逸植民地ニ割當テラレタノダガ、其細カイ事ハ聯合國間デ取極メレバ足リルノダカラ、獨逸ニ對シテハ植民地ヲ一括シテ聯合國ニ拋棄サセサヘスレバ充分ダ。「ヴェルサイユ」條約第百十九條「獨逸國ハ其海外屬地ニ關スル一切ノ權利及權限ヲ主タル同盟及聯合國ノ爲メニ拋棄ス」ト云フ規定ガ夫レデアル。

受任國ノ一部決定

五月七日獨逸ニ講和條件ヲ渡シタ直後ニ開カレタ四頭會議デ、「ロイド、ジョーシ」首相ハ獨逸植民地ノ受任國ヲ速カニ決定センコトヲ突如要求シタ、是レハ英國内政上ノ關係カラ一日モ早ク受任國ヲ公表シタイカラデ、又主要聯合國間ニハ既ニ大體ノ纏マリハツイテ居ルカラ、該會議ハ即刻左記ノ決議ヲシテ、直チニ之レヲ公表シタ。

一、「トーゴラント」及「カメルーン」ノ將來ニ關シテハ英佛兩國ヨリ國際聯盟ニ共同提議ヲナスコト。

獨領東阿弗利加

受任國

英國。

獨領南西阿弗利加

受任國

南阿聯邦。

獨領「サモア」群島

受任國

「ニュージランド」

「ナウル」島

受任國

英國。

「サモア」及「ナウル」以外ノ赤道以南獨領太平洋諸島 受任國

澳洲。

赤道以北ノ獨領諸島

受任國

日本。

二、英、佛、伊三國ノ代表者各一名ヨリ成ル委員會ヲ設ケ、之レヲシテ一九一五年四月二十六日ノ倫敦條約第十三條ノ適用ヲ講究セシムルコト。

伊 國 ト ノ 關 係

右ニ云フ一九一五年四月二十六日ノ倫敦條約トハ、伊太利ガ參戰前英、佛、露三國ト結ンダ軍事的協同行爲講和ノ際ノ取得地等ニ關スル密約デ、第十三條ハ左ノ如キ規定デアル。

佛國及英國ガ獨逸ノ負擔ニ於テ其阿弗利加植民領土ヲ増大スル場合ニハ、右二國ハ伊國ガ衡正ナル或補償殊ニ「エリトレー」「ソマリ」及「リビー」ノ伊國植民地並ニ佛國及英國ノ隣接植民地ノ境界ニ關スル問題ヲ伊國ノ利益ニ解決スルコトヲ要求シ得ベキコトヲ主義上承認ス。

伊太利ハ「フキユーメ」其他デ倫敦條約以上ノ土地ハ得タガ、本條ノ補償約束ガ實現サレタコトハ、今日迄未ダ之ヲ聞カス。

大正八年五月七日ノ首相會議デ獨逸植民地受任國ノ割當ハ大體定マツタガ、「トーゴラント」ト「カメルーン」トノ英佛受任地ノ境界ハ未定デ、又東阿弗利加ニ付テ白耳義ト葡萄牙カラ要求ガ出テ居ル。右ノ内「トーゴラント」ト「カメルーン」トノ境界ニ關シテハ英佛間ニ協議纏マリ、七月十日倫敦デ宣言書ガ調印サレタ。東阿弗利加ノ一部ヲ白耳義ノ受任地トスル件ハ八月五日ノ委任統治委員會デ決定シ、同月七日最高會議ヲ通過シタ。殘ルハ葡萄牙ニ係ル東阿弗利加ノ一隅デ「ロヴマ」河ノ河口カラ「ムシンジ」河ノ合流點ニ至ル迄ノ小地、通稱「キオンガ」三角地デアルガ、此地ハ元來葡領デ在ッタノヲ獨逸ガ橫領シタノデ、又委任統治制ヲ施クニハ餘リニ小サ過ギルト云フ理由デ、之レヲ葡國植民地ノ一部ニ加ヘルコトニ八月五日ノ委任統治委員會ハ決議シ、九月二十五日最高會議ノ同意ヲ得タ。

委 任 統 治 委 員 會

右ニ云フ委任統治委員會ナルモノハ六月二十七日ノ首相會議デ設ケタモノデ、我國ハ珍田子爵、米ハ「ハウス」大佐、英ハ「ミルナー」卿、佛ハ「シモン」殖相ヲ指シタ、此委員會ノ主タル任務ハ委任統治條項ヲ討究決定スルノニ在ル。元來委任統治條項中少クモB及C式ハ對獨平和條約調印前ニ之レヲ作り、平和條約中ニ挿入スル心組デ、「スマツツ」案即チ聯盟規約第二十二條第八項ハ設ケラレタノデアルガ、豫期ノ通りニ

運バナカツタ爲メ、セメテ出來ルナラ「ウキルソン」大統領ヤ「ロイド、ジョージ」首相ノ離巴前ニ、委任統治條項ノ標準様式丈ケデモ極メテ置キタイ氣持デ、前記委員會ヲ設ケ、「ミルナー」卿ハ既ニB式及C式條項ノ草案ヲ作ツテ居タカラ、六月二十八日佛國殖民省デ開カレタ委員會ノ第一回會議ニ之レヲ提出シタガ、實際討議シテ見ルト思ツテ居タ様ニ簡單ニハ行カス、其後委員會ハ倫敦デ開カレタガ、Bノ様式ニ付テハ土民兵ノ問題ヲ除イテハ餘リ異論ハ無カツタ。

B 式 條 項

此土民兵問題トハ曩ニ述ベタ通り土民兵デモ受任國國防ノ爲メニハ之レヲ使用シ得ルト云フ佛國ノ主張デア
ル、國際聯盟委員會ハ佛國ノ要求ヲ容レテ、領土トハ受任地ノミナラズ母國ノ領土ヲモ含ムトノ解釋ニ同意
シタガ、獨逸ニ對シテモ此解釋ヲ有效ナラシメル爲メ「ヴェルサイユ」條約中ニ該領土及母國ノ領土ト明記
センコトヲ「クレマンソー」氏カラ講和會議起草委員會ニ要求シタ所、英國起草委員ハ聯盟規約ノ英文ニハ
defence of the territory ト書イテ無ク、單ニ defence of territory ト記載シテ在ルノダカラ、右ノ追加ハ蛇
足タルノミナラズ領土ノ意義ヲ該領土及本國領土ニ限定シ、從來ヨリモ却テ其範圍ヲ限局スル嫌ガアルトテ
之レニ反對シ、聯盟規約ハ修正サレズニ終ツタ、其後委任統治委員會デ佛國殖民大臣ハ再ビ此問題ヲ提起シ
大正八年十二月九日ノ最高會議ハ佛國ノ要求ヲ容ルルニ決シ、米國亦之レニ同意シタノデ「トーゴーラン
ド」及「カメルーン」ノ英國受任條項第三條ニハ只「受任國ハ地方警察ノ目的及右地域ノ防備ノ爲メニスル

場合ヲ除クノ外、右地域ニ於テ陸軍若ハ海軍ノ根據地ヲ建設シ、築城ヲ爲シ又ハ土民ノ軍隊ヲ組織スルコト
ヲ得ズ」ト規定シテアル丈ケナノニ、此等地方ノ佛國受任條項ニハ同條ニ第二項トシテ「尤モ斯克組織セラ
レタル軍隊ハ、一般の戰爭ノ場合ニ是テ攻撃ヲ擊退シ、又ハ委任統治組織外ノ地域ノ防備ノ爲メ、利用セラ
ルルコトヲ得ルモノトス」トノ規定ガ加ヘラレテ居ル。

C 式 條 項

B式委任條項ノ一般討議ハ比較的速カニ片付キ、大正八年末ニハ既ニ最高會議ニ於テ主義上ノ承認ヲ與ヘタ
ガ、C式條項ハ之レニ反シテ容易ニ纏マラナカツタ、既ニ六月二十八日ノ委任統治委員會第一回會議デ珍田
子爵ハ、B式條項ニハ第五條デ委任地域ノ出入居住ニ關シ聯盟國民ニ均等待遇ノ保障ヲ確認シテ居ルニ拘ラ
ズC式條項ニハ何等之レニ類スル規定ガ無イガ、受任國ガ門戸開放主義ヲ實行スルノハ聯盟ノ本旨ダカラ、
C式條項ニモ同様ノ保障ヲ設ケルノガ當然ダト主張シ、「ミルナー」卿ハC式ニ依ル受任國ハ受任地ヲ本土ト
一體ヲ爲スモノトシテ取扱ヒ得ルノダカラ、同一ニ論ズルコトハ出來ヌト反駁シ、此論戰ハ其後長ク續イタ
我方ノ目標トスル所ハ云フ迄モ無ク今度濠洲ノ委任統治ニ歸シタ諸島デ、獨逸領時代ニ日本人ガ享有シテ居
タ居住往來其他諸權利ヲ持續セントスルニ在ル、之レハ濠洲デ我同胞ノ受ケツツアル差別的待遇ニ鑑ミ又濠
洲ガ是等諸島ヲ占領シ得ルニ至ツタ歴史ニ照シ、日本トシテハ頗ル當然ノ要求デ、既ニ講和準備委員會ニ於
テモ此趣旨ノ決議ヲシタノデアルガ、他方C式委任統治ヲ案出シタ動機ニ顧ミレバ、反對意見ニ必ズシモ理

窟が無イトハ云ヘス、若シ忌憚ナク事態ヲ批評スレバ、C式委任統治ノ爲メニ聯盟規約第二十二條第六項ヲ設ケル時我方ガ^{§§}デハイケスト云フ様ナ議論ヲスル代リニ、前掲「イーマンス」白國外相ノ發議ヲ支持シ居住通商ノ自由ヲ留保シテ置クベキデアツタ。尤モ此主張ガ通ツタカ否カハ無論分ラヌガ「ウキルソン」大統領ガ確カニ共鳴シタト思フカラ、後日ニ至ツテ此要求ヲスルヨリ、成功ノ可能性ガ遙カニ多カツタコトハ云フ迄モ無イ、眞相ハC式委任統治ヲ討究スル際、我方ハ日本ノ受任諸島ニ出來ル丈ケ無虧ノ統治權ヲ行使セントスルノ志望デ一杯ダツタ爲メ、大局ヲ注視スル餘裕ガ無カツタノデアル。

最高會議ニ於ケル經緯

英國ハ大正八年十二月八日最高會議ニB式及C式ノ委任統治條項ヲ提出シタノデ、同會議ハ十二月九日及二十四日ニ之レヲ討究シタガ、我方ガ前後ヲ通ジ其主張ヲ最モ強硬ニ又忌憚ナク開示シタノハ二十四日ノ會議デアルカラ、其時配布シタ我覺書ノ全譯文ヲ左ニ掲ゲル。

一、委任統治委員會ハ國際聯盟規約第二十二條第五項及第六項ニ謂フ領土ニ適用セラルベキB式及C式二種ノ様式ヲ議定セリト雖モ、或國ノ委員ガ爲シタル留保アルニ依リ、決議ハ委員會全會一致ノ意見ヲ示シタルモノニアラズ。

日本委員ハC式條項中ニ、聯盟國ノ人民ガ受任國ノ支配スル領土内ニ於テ享有スル機會均等ノ原則ニ關スルB式様式第五條ノ規定ヲ挿入セムコトヲ、委員會ニ提議セリ。

此提議ハ委員會ノ同意ヲ得ザリシニ依リ、日本委員ハ委員會ノ他ノ委員ガ承認シタル儘ノC式様式ノ文案ニ付、一切ノ留保ヲ爲スノ止ムナキニ至レリ。

二、聯盟國ガ對等ニテ享受スル門戶開放制度ノ利益ニ關スルトキハ、特ニB式様式トノ間ニ等差ヲ設クルハ容認スベカラザルモノト思ハル、規約第二十二條第六項ニ依レバ、C式條項ノ領土ハB式條項ノ領土ト何等ノ區別ナク、受任國領土ノ一部トシテ其法律ニ因テ統治セラルルモノナリ、斯クノ如ク編纂セラレタル條項ガ受任國ニ對シテ正義公明ノ意ヲ示シタルニ過ギザル國際聯盟ノ普通原則ニ相反スベキ何等權利ヲモ與ヘザリシコト亦明白ナリ、聯盟國中ノ或モノヨリモ或他ノモノノ有利ナル待遇ヲ留保スルハ該制度ノ精神ニ背クモノナリ。

三、C式條項ノ規定ニ依リテ統治セラルベキ南太平洋諸島ニ關シテハ、巨額ノ金ガ島内ニ投資セラレ、且ツ日本人ガ間斷無ク力ヲ盡シタルニ依テ、島内ノ天產物發達セルノ事實アルヲ以テ、日本ハ特別ナル利害ノ關係ヲ有ス、日本政府ガ前記ノ如キ提議ヲ爲シタルハ、他ノ外國人ト異ナル待遇ノ目的物トナリタル濠洲ニ於ケル日本人ノ地位ガ其心中ニ浮ビタルガ爲メナリ、若シ此地位ニシテ受任領土ニ迄擴張セラルベキモノトセムカ（濠洲政府ガ其占領諸島内ニ於テ現ニ之レヲ實行セル爲メ其虞アリ）之レ即チ國際聯盟ノ精神ニ全然矛盾スルモノニシテ、日本人ニ一切ノ商業ヲ禁止シ其獲得シタル權利ヲ侵害スベキ眞ノ不正義ニ歸着スルモノナリ。

四、戰爭前日本人ハ通商、航海、居住、財産ノ取得等ニ付、獨逸官憲ヨリ他諸國ノ人民ト對等ノ待遇ヲ受ケ

居タリ、日本ノ對獨戰爭參加及前記ノ委任制度ヲ設置セムガ爲メ其聯合國ニ與ヘタル援助モ、若シ機會均等ノ原則ヲ容認セザルトキハ、日本人ヨリ其戰爭前ニ享受シ居リタル利益ヲ取上ゲ、之レヲ該領土ガ敵手ニアリシ時ヨリモ劣等ノ地位ニ置クニ該當スルモノニシテ、日本ノ輿論ハ斯クノ如キ結果ヲ容認スルコト能ハザルベク、此結果ガ日本ノ爲シタル盡力ノ報酬ナリト了解スルコト能ハザルベシ、日本政府ハ輿論ノ前ニ於テ之レヲ證明シ其責ニ任ズルコト能ハザルベキコト勿論ナリトス。

五、如上ノ理由ニ因リ日本政府ハ、委任統治委員會ガ過半数ヲ以テ決定シタルガ如キC式樣式ハ之レヲ承認スルコト能ハズ、仍テ該樣式中ニ機會均等ニ關スルB式條項第五條ト同一ノ規定ヲ挿入センコトヲ提議ス當時最高會議ニ我國ヲ代表セル松井大使ハ右覺書ヲ布衍シテ、「本件ニハ主義ノ問題ト政治上ノ問題トガ在ル主義ノ問題トシテハ總テノ聯盟國民ハ必然機會均等主義ニ均霑スルノガ聯盟ノ精神ダト確信スル、規約第二十二條第五項ニ列舉セル通商經濟上ノ公平ナルモノハ當然第六項ニモ適用アルノヲ疑ハヌ、元來第六項ヲ以テ領土併合ト看做スモノト委任統治ダト云フモノト二個ノ解釋論ガアル、現ニ此規定成立ノ際自分モ議事ニ參加シタガ、假令妥協ノ結果出來タノニ相違ナイトシテモ、聯盟ノ精神ニ没却シ聯盟國ニ對シ區別的待遇ヲ認容スルガ如キコトハ、何人モ想像シナカツタ處デアル、國際聯盟ノ聯盟國間ノ公平主義ノ上ニ立ツモノデアルコトヲ忘レテハナラヌ、日本政府ハ第二十二條ノ解釋トシテ第五項通商上ノ機會均等主義ガ第六項ニモ適用アルコトニ付、今日迄疑ヲ挿ンダコトハナイ。此主義ノ問題以外ニ本件ハ更ニ重要ナ政治問題ニ關聯シテ居ル、日本ハ一九一四年大戰ノ初メカラ參戰シ、太平洋及印度洋カラ敵國軍艦ヲ一掃シタノハ實ニ帝國海

軍ノ偉功デアル、萬一日本ガ戰爭中ニ爲シタ努力ノ結果却テ戰前ヨリ其國民ヲ不利益ノ地位ニ置ク様ナコトニ成レバ、此様ナ理窟ハ到底日本ノ輿論ニハ了解出來ヌデアロウ、帝國議會ハ當ニ開會サレントシテ居ル、若シ日本ノ正當ノ要求ガ容レラレナケレバ、政府ノ立場ノ困難ナノハ勿論、國論ノ沸騰スルノハ明カデアル自分ハ最高會議ガ此正當ノ要求ニ對シ日本ニ満足ヲ與フベキヲ信ジテ疑ハヌ」ト縷々論辯シタ、英國全權ハC式委任統治ノ基礎ガ「受任國領土ノ構成部分トシテ其國法ノ下ニ施政ヲ行フ」ニ在ルコトヲ繰返シ、日本ガ條約ニ調印シ進ンデ之レニ批准ヲ與ヘタ今日、右ノ主張ヲ聞クハ意外トスル所ダト反對シ、最高會議ノ空氣ハ到底我方ヲ支援セヌ大勢ダツタカラ、松井大使ハ訓令未着ヲ理由トシテC式樣式ノ討議ヲ延期センコトヲ要求シ、二十四日ノ會議デハB式樣式丈ヲ主義上可決シテ、之レヲ起草委員會ニ廻附シタ。

日英間ノ折衝

以上ノ如キ形勢ダカラ我方トシテハ寧ロ本件ニ直接ノ利害關係アル英國丈ケト交渉スル方ガマダ増シノ様ニ考ヘラレタノデ、此方針デ進ムコトトシ、當分其儘ニシテ置タラ、大正九年一月二十二日「カーゾン」卿ハ松井大使ニ書信シテ、愈々最高會議モ大使會議ニ事務ヲ引繼グコトニ成リ、自分ハ本夕倫敦ニ出發スルニ付テハ、其後ノ日本側ノ成行ヲ出發前ニ承知シタイト申込シタ、我方ハ之レニ對シテ何等具體的返事ハシナカツタガ、國際聯盟第二回理事會ニ引續ギ土耳其トノ平和條約案審議ノ爲メ最高會議ガ倫敦デ開カレルコトニ成ツタノデ、筆者ハ二月九日カラ同地ニ行ツテ居タラ、二十三日ニ「フロマジョー」氏ハ「ベルトロー」

佛國外務總務長官ノ傳言ダガ、佛國ハC式條項ニ關スル日英ノ論爭ヲ仲介シテ之レヲ纏メル爲メニ協力スルヲ辭セスト筆者ニ内報シタ、若シ佛國ノ介入デ話ガ付ケバ至極結構ダカラ、筆者ハ直チニ此事ヲ珍田大使ニ報告シ、「フロマジヨ」氏ト合議ノ上C式樣式第四條（成約第二條第一項）「受任國ハ本委任統治條項ニ依ル地域ニ對シ……………國ノ構成部分トシテ施政及立法ノ全權ヲ有スベク且情況ニ應ジ必要ナル地方的變更ヲ加ヘテ本地域ニ……………國ノ法規ヲ適用スルコトヲ得」ノ末段ニ「但シ受任國ハ該地域ニ於テ他ノ署名國ノ臣民及人民（會社及組合ヲ含ム）ニ對シ何事ニ依ラズ其國民ニ與フルト同一ノ權利ヲ保障スルヲ要ス」ト云フ規定ヲ追加スルコトトシ、之レヲ基礎トシテ英國側ト折衝スル様「フ」氏ヲ通ジテ佛國側ニ申入レタ其ノ後珍田大使ハ倫敦デ英國當局ニ、又松井大使ハ巴里デ佛國當局ニ、夫レ夫レ交渉シタガ少シモ解決ノ光明ヲ認メ得スカラ、筆者ハ我方ノ要求ヲ幾分制限シテ兩當事國一方ノ臣民ハ他方國ノ受任地ニ於テ其既得權ヲ尊重セラレ、且ツ無條件最惠國待遇ヲ保障セラルトノ宣言書ヲ、日英兩國間ニ交換シテハ如何ト思ヒ、此案ヲ珍田、松井兩大使並ニ「フロマジヨ」氏ニ渡シタ。然ルニ四月八日「カーゾン」卿ハ珍田大使ニ宛テ佛國大使ノ取次イダ第四條末段追加規定案ハ日本政府ガ明カニ拘束サレテ居ル對獨平和條約第二十二條ノ明瞭ナ規定ヲ再議セントスルモノデアルカラ、英國政府ハ之レニ同意スルコトハ出來ス、本問題解決累次ノ遅延ハ最も重大ナ困却ヲ惹起シツツアルニ付、日本政府ハ出來ル丈ケ最モ速カニ委任條項ニ最終的承諾ヲ與フル途ヲ講ゼラレンコトヲ希望ス、ト云フ極メテ無愛想否寧ロ暴慢非禮ノ公信ヲ突附ケタ。

其後「カーゾン」卿病氣ノ爲メ又「サン、レモ」會議等ノ爲メ、右ニ對スル我方ノ回答ハ延ビ延ビニ成ツテ

居タラ、五月十日英國カラ此夏開カレル「スバー」會議デ各種委任統治樣式ノ最後決定ヲスル筈ダカラ、日本政府ハ本件最後ノ處理ノ爲メ其全權委員ニ對シ必要ノ訓令ヲ發セラレタイト申込デ。來タ公平ニ見レバ日本ノ主張ニハ大ニ無理ガアル、ツマリ聯盟規約第二十二條ヲ作ル時ニ爲サナカツタ手落ノ後始末尻拭ヲシテ居ルノデ、其衝ニ當ツタ諸人コソ好イ面ノ皮ダ。筆者モ亦其一人ダガ假令多少ノ無理ガ在ツタニシテモ、未ダ交渉ノ中途ニ在ル本件ニ付、四月八日ノ公信ヤ五月十日ノ照會ヲ突付ケルノハ、對等ノ列強トシテ日本ヲ取扱フ所以デハ勿論ナイカラ、吾々若イ者ハ隨分憤慨シタ。恰モ此大正九年ノ七月三十日ハ第三回日英同盟協約ノ廢棄通告期ダカラ該同盟ノ存續ヲ望ンデ居ル我當局ハ自ラ横車ヲ押シテ論戰ノ火蓋ヲ切リナガラ、今ハ成ルベク英國ノ機嫌ヲ買フニ努メテ居ル。何故日英同盟此上ノ繼續ガ左程有リ難イノカ筆者ニハ少シモ了解出來ナカツタ。其理由ハ前ニ詳シク述べタ通りデアルガ同盟問題ニ關スル英國ノ意嚮モ概略見當ガツイタノデ、六月十三日珍田大使ハ「カーゾン」卿ニ對シ我方ガ佛國ヲ通ジテ出シタ妥協案ガ英國ノ爲メニ無下ニ一蹴サレタノヲ難詰スルト同時ニ、更ニ妥協的精神ニ基キ此上ノ讓歩トシテ大體既得權尊重及最惠國待遇ノ二點ヲ基礎トシテ本件ノ解決ヲ計ルニ躊躇セヌ旨ヲ述べ、同月十八日更ニ同卿ニ日本政府ガC式樣式問題急遽決定ノ希望ヲ有スルコトハ英國政府ニ毫モ讓ラヌ、其爲メニ今迄出來ル日ケノ手段ヲ講ジタノデアル、日本ガ「ヴェルサイユ」條約ノ拘束ヲ受ケテ居ルコトハ今更ラ云フ迄モ無イガ、同條約第二十二條第六項ノ解釋ニ關シテ英國ノ見解ト一致出來ヌノハ遺憾デアル、然シ更ニ妥協交讓ノ精神ニ則リ左記程度迄ノ讓歩ナラ之レヲ爲スニ吝カデナイ、ト云フ書翰ヲ手交シ、口頭デ布衍説明シタ。

英國又ハ其自治領ヲ受任國トスルC式統治地域ニ於テ、日本國臣民並ニ會社及組合ノ既得權利又ハ利益ハ尊重セラルベク、日本臣民、會社及組合ハ通商及航海ニ關シ受任國以外ノ國ノ臣民又ハ人民並ニ會社及組合ト異ル殊別待遇ヲ受クルコトナカルベシ。

六月二十九日外務次官「サー、エーヤ、クロー」氏カラ會見ヲ申込シテ來タノデ珍田大使ハ外務省ニ往訪シタラ、氏ハ委任統治様式問題ヲ是非共「スバー」會議デ解決スル必要ガアルカラ、出發前了解ヲ得タシト前置シテ、日本今回ノ提案ヲ審査シタガ到底同意ヲ表シ難イ、本件ハ條文ノ解釋上極メテ明白ノコトデ、曩ニ巴里ノ最高會議デ他關係國ガ全然英國ト同様ノ解釋ヲ取ツタニ拘ラズ、日本獨リ反對シテ今日ニ追ンダノハ甚ダ了解ニ苦ム所デアル、トテ英國從來ノ主張ヲ繰返シテ同意ヲ求メタ。珍田大使ハ「カーゾン」卿ニ爲シタト同様ノ説明ヲ縷述シ、我妥協案提出ノ理由ヲ詳細開陳シタガ「サー、エーヤ」ハ聯盟規約ノ規定ガ濠洲ノ併合論ニ對スル妥協案トシテ成立シタ來歴ニ顧ミ、苟モ濠洲國法ノ適用ヲ制限スルガ加キ協定ハ、濠洲官憲ト協議スル迄モナク英國政府デ同意スル譯ニハ行カヌト斷言シ、遂ニハ若シ「スバー」會議デ又々交渉不調ニ陥ル場合ニハ委任統治制全部ノ崩潰トナルカモ知レスト放言シタ、此會談ハ一時間半餘ニ亘ツタガ、水掛論ニ終ツテ何ノ要領モ得ナカッタ。

佛 國 ノ 仲 介

七月五日カラ開カレル「スバー」會議ニ先ダチ、日英佛伊四國代表ハ白國委員ヲ加ヘ豫備的研究ヲスル爲メ

七月一日「ブルツセル」ニ集合シタ、筆者ハ珍田全權ニ隨ツテ之レニ參加シタガ、何ントカシテ此案件ヲ纏メルコトハ出來モヌノカト思ヒ、再ビ佛國ノ仲介ヲ煩ハシテ見ルコトトシ、七月三日「フロマジョー」氏ニ左ノ腹案ヲ示シタ。

但シ他締約國ノ臣民及人民（會社及組合ヲ含ム）ハ該地域ニ於テ一切ノ其既得諸權利ノ享有ヲ存續スベク且ツ通商貿易ニ關シ受任國ガ一國ノ臣民及人民ニ與フルト同一ノ特典ヲ無條件ニテ享有スベキモノトス。之レハ六月十八日珍田大使ガ「カーゾン」卿ニ渡シタ案文ト同一趣旨ノモノデ、二月二十五日ノ案ニ比較スルト大ナル讓歩デアル、蓋シ國民待遇ノ要求ヲシテモ到底承諾ヲ得ル見込ハナイシ、又移民ニ付テハ規約第二十二條ヲ作ル時ニ英本國政府ガ濠洲代表ニ言質ヲ與ヘル模様ナノデ、是等ノ諸件ヲ協定ノ範圍外トシ、英國ノ同意シ易イヨウニ規定シタノデアル。右ニ對シテ「サー、セシル、ハースト」ハ既得權ノ保障丈ケナラ異存ハナイガ、其他ノ條件ハ承諾困難ダト筆者ニ告ゲタ、此回答ハ七月六日「スバー」デ正式ニ「カーゾン」卿カラ珍田大使ニ爲サレ、同卿ハ英國側ノ考案トシテC式條項第四條ニ追加スベキ左ノ規定ヲ示シ、此程度以上ノ讓歩ハ絶對不可能ダト言明シタ。

但シ國際聯盟ノ原聯盟國ノ國民ニシテ一九一四年八月一日以前ニ委任統治地域内ニ居住シ又ハ財産ヲ所有セル者（會社及組合ヲ含ム）ガ、濠洲ノ法律ニ依リ同洲ニ入國又ハ居住シ若ハ財産ヲ所有スル資格ナキ者ナルトキハ、公正ナル補償ナクシテ該地域ノ撤退又ハ其財産ノ剝奪若ハ業務行使ノ禁止ヲ強制セラルルコトナカルベシ。

「カーゾン」卿ハ更ニ語ヲ續ケ、本件ヲ聯盟理事會ニ移シテモ矢張り最高會議ノ行詰リヲ繰返スニ過ギヌカラ、規約第十三條ニ基キ仲裁裁判ニ附スルノガ、本件解決ノ唯一最良ノ方法ダト思フト述べ、是非何トカ「スバー」會議デ決定セネバナラスト強硬ニ主張シタ。其後本件ハ其儘ニ成ツテ居タガ「スバー」會議モ七月十六日ニハ閉會ノ豫定ナノデ、若シ英國ガ突飛ナ提議デモスルト、日英ノ國交上甚ダ面白カラヌ事態ヲ生ズル虞ガアリ、殊ニ濠洲ニ對シテ我輿論ヲ刺戟スルノハ明カダカラ、珍田大使ハ七月十四日「カーゾン」卿ヲ訪問シテ、未ダ東京カラ何等ノ回訓モ來ナイガ、帝國議會デ本件ニ關スル質問ガ出テ、外務大臣ハ目下關係國ト交渉中ダト答辯シタ、之レニ依ツテ見ルモ我國民ガ本問題ニ餘程ノ關心ヲ持ツテ居ルコトハ明カダカラ、日本政府ノ回答到着前ニ最高會議ニ上程サレル様ナコトガアルト、甚ダ面白ク無イ事態ヲ生ジハセヌカト憂慮ニ堪ヘヌ、又日英關係ノ大局カラ見テ、本問題ノ如キモノハ出來得ル限リヲ竭シテ法廷以外ニ妥協ノ途ヲ講ズルノガ至當ダト思フ、若シ仲裁裁判附託等ノ議論ガ出ルト、必ズ日本ノ輿論ヲ刺戟シ對濠關係惡化ノ虞ガアル、講和會議デ濠洲ガ主トシテ我ガ人種平等提議ニ反對シタ事實ハ、日本國民ノ今尙ホ忘レヌ所デアルカラ、此上事態ヲ紛糾サセヌ爲メニ、今回ノ最高會議ニハ附議セヌコトトシ、日本政府ノ回答ヲ待チ倫敦デ協議ヲ續ケル方ガ得策ダト述ベタ。「カーゾン」卿ハ自分ニ於テモ成ルベク法廷以外ニ本件ヲ解決セント欲スル精神カラ過日ノ提案ヲシタ次第アルガ、既ニ一週間以上ニモ成ルノニ未ダ日本政府ノ回答ニ接セヌ此上ハ已ヲ得ズ該案ハ拒絕サレタモノト認メ、本件ヲ最高會議ニ附議スルノ外ナイト思フ、元來日本ガ成ルベク最高會議ノ上程ヲ避ケムトスルハ甚ダ了解シ難イ所デ、或ハ各國共同ノ反對ヲ慮リ殊更ニ遷延シテ居ル

ノデハ無イカト、無遠慮千萬ナ質問ヲ發シタノデ、珍田大使ハ本件ガ我國外交調査會ノ議ヲ經ネバナラヌ爲メ、急遽決シ難イ所以ヲ説明スルト同時ニ、遷延策ヲ云々スルハ極端ナル邪推デアルト反駁シ「スバー」會議ニハ遂ニ上議セラレズニ終ツタガ、其後モ「カーゾン」卿ハ日本政府ガ態ト本件ノ解決ヲ遲延シテ居ルノダトノ考ヲ捨ズ、七月二十一日ニハ此趣旨ノ苦情ヲ洩シタ手紙迄珍田大使ニ送ツタ、按ズルニ倫敦政府ハ濠洲側カラ盛ニ督促サレルノデ、板挾ミト成ツテ困ツテ居ルノニ相違ナイ、此點カラ見レバ同情ニ値スルガ我ニ對スル應答振ハ甚ダ心外デアツタ。

八月三日珍田大使ハ外務省ニ本件ノ主官タル「サー、セシル、ハースト」ヲ訪問シ、左ノ非公式覺書ヲ手交シタ。

日本政府ハ一意聯盟規約ヲ忠實ニ遵守セムトスルモノニシテ、規約解釋ニ關スル其見解ヲ披瀝スレバ左ノ如シ。

一、第二十二條第六項ニ所謂土着人民ノ利益ノ爲メニスル前記ノ一定條件ノ何タルヤ、第六項中列舉セル條件ノ内容ニ立チ入りテ茲ニ是ヲ考覈セザル可ラザル處、右條件中三項ガ直接土民ノ休戚ニ關スルコト一目了然ナリ、然ルニ爾餘ノ二項即チ軍備禁止及通商上ノ機會均等ノ兩條件ハ幾分不明間接ノ外觀ナキニ非ザルモ、尙ホ土民ニ平和ノ福祉ト自由市場ノ恩澤トヲ確保スルコトニ依リテ其利益ヲ計ルコトヲ窮極ノ目的ト爲セルコト否ムベカラズ。

此點ハ同條ノ根本原則ヲ宣示シ第二項以下各項ノ基礎ヲ爲セル第一項ニ照ラシ見ルトキハ更ニ一層明瞭

トナルベシ、然ルニC式委任統治條項ニハ軍備禁止ニ關シ特ニ規定ヲ爲シ居ルニ拘ラズ、通商機會均等ニ關シ何等言及セズト雖モ、土民ノ休戚ヨリ見レバ右兩條件ノ間何等輕重ヲ置クベキニアラザルヲ以テ前者ニシテ委任統治條項中ニ包含セラルル以上、後者ヲ除外スルガ如キハ全ク其理由ヲ認ムル能ハズ。

二、若シ日本ノ見解ニシテ正當ナリトセバ、B式トC式トノ委任統治間ニ何等差違ナキノ結果トナラザルヲ得ズトハ反對者ノ一論旨ナルモ、C式ノ場合ニ於テハ委任國ハ委任地域ヲ「自國々土ノ構成部分トシテ自國々法ノ下ニ」施政ヲ行フノ權アルニ反シ、B式ノ場合ニハ委任國ハ其レ自ラ最モ適當ト認ムル方法ニ依リテ施政ノ責ニ任ズベキモノトセラレ居ルニ過ギズ、即チ前者ノ場合ニアリテハ一定ノ條件アル外統治權ハ絕對ナリ、後者ニアリテハ常ニ聯盟總會及理事會ノ監督及監理ヲ受クルモノナルノ差異アリ從ツテ兩者ノ間ニハ截然タル區別ノ存スルコト明瞭ナリ。

三、更ニ又第六項ニ依ル委任國ノ立法權ハ絕對ニシテ何等制限ヲ負フベキモノニアラズトノ議論アリト雖モ、委任國ノ立法權ハ既ニ前記第五項ニ規定セル該條件ニ依リテ制限セラレ居ルモノニシテ、問題ハ要スルニ通商上ノ機會均等ガ是等諸條件中ニ包含セラレ居ルモノナリヤ否ヤニアリ、從ツテ斯カル議論ハ故意ニ問題ヲ作ルノ譏ヲ免レズ。

四、日本政府ハC式委任統治ガ併合主義ニシテ委任統治主義トノ妥協ノ結果ナル事ヲ記憶スルモ、之レト同時ニ他面日本政府ハ其爲メニ委任統治及國際聯盟ノ根本精神ヲ沒却シタルモノナリトハ夢想ダニセザリシ所ナルノミナラズ、右妥協ガ最高會議ニ於テ論議決定セラレタル際ニモ、右通商上ノ機會均等ノ保

障ガ第六項ニ適用ナキコトヲ何人モ指摘シタルコトナク、若シ當時此點ガ問題トナリ若クハ是等字句ガ右様ノ解釋ニ陷ルベキ何等カノ議アリシナラムニハ、日本全權ハ規約案文ニ對シ同意ヲ拒ミタルヤ論ナシ。

五、日本政府ガ常ニ以上ノ見解ヲ有シタルハ、「ヴェルサイユ」條約調印ニ先チ佛國殖民省ニ於テ開カレタル委任統治委員會第一回會合ノ席上、本全權ノ執リタル態度ニ依リテモ亦明白ナル所ナリ。

右ハ我方從來ノ主張ト其因テ基ク所以ヲ繰返シ説明シタモノデ、專ラ英國側ヲ納得サセル目的デ作ツタモノダガ、此問題ニ關シテ東京カラ回訓ガ届イタラ、其趣旨ヲモ亦讀ミ聞カセタ、即チ左ノ通りデアル。

一、帝國政府ニ於テハ英國ノ提出ニ係ル大正八年十二月二十四日巴里最高會議附議C式條項ニ對スル修正要求ヲ撤回シ、該條項ニ調印スルニ異存ナシ、但シ右ハ濠洲ノ委任統治地域ニ於ケル帝國臣民ノ待遇ニ付、右協約ヲ離レテ日英間ニ別ニ協定ヲ遂ゲタル上ナルコトヲ條件トス。

二、英國側提案ノ如ク濠洲ノ委任統治地域ニ於テ一九一四年八月一日以前ニ帝國臣民ガ具體的個別的ニ有シタル既得權ノミ之レヲ尊重スルニ止マルトキハ、假令聯盟規約ヲ日本ノ爲メニ最モ不利益ニ解釋スル場合ニ於テモ、帝國側ニ於テ之レヲ主張シ得ル所ナルニ願ミ、英國ニ於テ吹聴スルガ如ク讓歩トハ認メ難ク、帝國政府ニ於テ此程度ノ協定ヲ以テ満足スルコトハ頗ル困難ナリ、帝國政府トシテハ舊獨領時代ニ帝國臣民ガ享有シタル程度ノ待遇ヲ濠洲ノ受任地ニ於テ保障セラルルノ協定ヲ英國側トノ間ニ成立セシメンコトヲ希望スルモノナリ。

三、之レヲ具體的ニ謂ヘバ「スバー」ニ於テ受領セル英國提案ノ如キ極メテ狭キ既得權ニ止マラズ 少クトモ從來獨領當時ノ如ク本邦船舶ガ「ラバウル」港ニ寄港シ、貨物ノ積卸ニ從事スルノ自由ヲ有シ、又「ユーギニヤ」ニ於テ新ニ「コブラ」耕地ヲ所有シ且ツ之レヲ經營スルノ自由ヲ認メラレ、尙ホ居住及營業ニ付テモ單ニ一九一四年八月一日ニ現在シタル者及其當時ノ營業ニノミ止メス、其制限ヲ今少シ寛大ナラシムルコトヲ要望スルモノナリ。

四、帝國政府ニ於テハ上記ノ要望ヲ爲スト雖モ、右地域ニ日本移民ヲ送ラムトスル意思ヲ有スルモノニアラズ、從テ若シ此點ニ付濠洲政府ニ於テ何等カ帝國政府ノ諒解ヲ求ムルノ意アルニ於テハ、帝國政府ハ之レガ考慮ヲ辭スルモノニアラズ。

第三十五章 C式條項ノ成立ト日本

日 本 ノ 宣 言

前記ノ如ク如何ニ交渉ヲ重ネテモ日英間ニ折合ハ付カヌ、其内大正九年十一月十五日カラ第一回聯盟總會ガ壽府ニ開カレ、英國ハB式條項ハ既ニ出來上ツテC式ノ成立ヲ首ヲ長クシテ待ツテ居ルノダカラ、總會中ニ是非共成立サセタイト連リニ強要スル、我方トシテモ到底妥協ノ纏マル見込ハ立タナイカラ「スバー」デ英國ノ出シタ案ノ如キモノヲ承諾スルヨリ、寧ロ一方的宣言ヲシテ本件ヲ打切り、赤道以北ノ舊獨領太平洋諸島ニ對スル我委任統治權ヲ確立サセタ方ガ得策ダトノ見地カラ、此方針デ英國ト話ヲ進メ、十二月十六日石井子爵ハC式條項ガ聯盟理事會デ決定サレル時ニ爲スベキ左記宣言案ヲ「バルフォア」氏ニ内報シタ。

日本帝國政府ハ國際聯盟ノ根本精神將又聯盟規約ノ解釋上、通商及貿易上ノ機會均等ノ保障ニ關スル一項ヲC式委任統治條項中ニ挿入スベシトノ帝國政府從來ノ主張ガ正當ナルコトノ確信ヲ有ス、然レドモ和衷共同ノ精神ヨリ且ツ本問題ヲ未解決ノ儘ニ存置セシムルヲ欲セザルニ依リ、帝國政府ハ現在ノ形式ニ於テ委任統治條項ヲ制定スルニ同意スルコトニ決シタリ。

尤モ右ノ決定ハ委任統治地域ニ於テ帝國臣民ガ差別的且ツ不利益ナル待遇ヲ受クコルトヲ帝國政府ニ於テ容認シタルモノト看做スヲ得ズ、又帝國政府ハ帝國臣民ガ從來是等ノ地域ニ於テ享有シタル權利及利益ノ